

北見女学校と下田歌子・稲垣吉慎

久保 貴子

はじめに

下田歌子が一八九八（明治三十二）年十一月「帝国婦人協会」を設立し、翌年の一八九九（明治三十二）年五月に、帝国婦人協会付属実践女学校および女子工芸学校を設立したことは周知の事実である。しかし、それだけではなく、その生涯にわたり一般女子の教育に邁進し、多くの学校の設立に関わった。帝国婦人協会の設立直後から、女学校設立の意義と女子教育の重要性を説くべく積極的に地方遊説を行い、あわせて女学校設立のための視察を行っている。

全国各地に下田が蒔いた種は、その考えに共感した支援者たちによって、早々に北越支会と新潟支会の結成という形で実を結び、その後、それぞれの関連学校の創設（北越女学校、新潟女子工芸学校）へと発展している。このほか、下田に関わった主な学校と

して「順心女学校（理事長・校長）一九一八（大正七）年設立」「淡海女子実務学校（第二代校長）一九一九（大正八）年設立」「明德女学校（設置者・校長）一九二二（大正十）年設立」などがあげられる。

これらの学校の一つに「北見女学校」がある。北見女学校の設立と下田との関わりについては、先行研究の言及に乏しく、わずかに「下田歌子展―実践女学校と姉妹校」（二〇〇九（平成二十一）年度実践女子大学香雪記念資料館展示）で紹介されるにとどまっている。『実践女子学園100年史』などの下田歌子ならびに学園関係書籍にも触れられておらず、これまでほとんどその詳細が知られることはなかった。そこで本稿では、北海道北見国（現在の網走市）に短期間ではあったが存在した「北見女学校」について論じる。

北見女学校は、一九一〇（明治四十三）年、現在の網走市北見町南通りに、稲垣吉慎が仮校舎の「北見女学校」を開校し、一九一一（明治四十四）年網走市桂ヶ岡に新校舎（木造二階建て、寄宿

舎あり）を建設し移転した。小学校卒業以上の女子教育を行う、

網走管内初めての女学校としての意義は極めて大きいものであったが、一九一七（大正六）年閉校となった。稲垣吉慎は、下田歌子と同郷（現在の岐阜県恵那市）の出身で、はじめ小清水（現在の北海道斜里郡小清水町）に入植し、「小清水をつくった三つの礎石」（『小清水町開町100年物語』二〇一八（平成三十）年）の一つと称えられる開効社農場（開効社下田牧場、下田牧場、開効社牧場、小清水開効社北見牧場とも）を開き、その後網走（現在の北海道網走市）へ移って、この北見女学校の校主となった人物である。

下田歌子は、北海道教育会第一四回夏期講習会に招かれ、一九〇一（明治三十四）年八月五日札幌を訪問し、札幌女子尋常小学校において家政学を講義した。そして、この夏期講習会における講義内容や講演内容は、同年北海道教育会より『下田歌子先生家政学講義』として刊行された。当時、北海道での下田の講演は、およそ五〇〇人が来場するほど人気を博していた。

このように下田の来訪と講義が大きな契機となり、女学校を求める機運が盛り上がり、女学校設立は企図されたと考えられる。「北見女学校」の設立から閉校までの経緯を追うことで、特に下田歌子が北海道において、どのように女子教育を推し進めようとしていたのか、その一端が解明できるのではないかと考えている。

一 稲垣吉慎について

はじめに稲垣吉慎の概略について確認したい。現在までに残された一次資料は少ないが、「桂力岡公園物語」を参照すると、その概略が見えてくる。以下に、同書から稲垣吉慎に関する事跡を簡略に抜き出しておく。

- ① 一九〇三（明治三十六）年（一九〇四（明治三十七）年の誤記―稿者注）、稲垣吉慎が渡道し小清水に入植し牧場を開く。
- ② 一九一〇（明治四十三）年、下田歌子や貴田国平の協力を得て、現在の網走市北見町南通りに、仮校舎の「北見女学校」を開校。

- ③ 一九一（明治四十四）年、網走市桂ケ岡に、新校舎（木造二階建て、寄宿舎あり）を建設し移転。桂ケ岡は、稲垣が校舎の横の桂の古木を愛し、「桂力岡」と命名。

- ④ 網走管内初めての女学校で、小学校卒業以上の女子教育を行う。

裁縫や料理などを主として、家庭生活や作法を重視した。

- ⑤ 一九一二（明治四十五）年、生徒数は一三〇名となり、管内初の幼稚園も開園。

- ⑥ 一九一七（大正六）年、閉鎖

- ⑦ 一九二二（大正十二）年、庁立の網走高等女学校設置の元になる。

校長・稲垣吉慎は、この女学校設立資金準備のために、開効社

牧場を経営するが、それは「東京実践女学校校長下田歌子の、同校の基本財産に充当するため」であつたという（『網走新聞』・『小清水を拓いた人々』一九六八（昭和四十三）年、小清水町）。下田歌子と稲垣の接点を探るため、次に、稲垣について概観する。

稲垣吉慎は、一八五五（安政二）年七月七日美濃国恵那郡岩村町に生まれている。下田歌子は、同恵那郡岩村町に一八六〇（安政七）年に生まれているため、同郷の出身で下田より五歳程の年長であることがわかる。一八八一（明治十四）年七月から一八八三（同十）年二月まで美濃国恵那郡富田村の富田小学校の校長を務めてもいる。その後、一八八六（明治十九）年十二月「職員録」（『官報』第1049号附録）に拠ると、七宗小林区署（美濃国武儀村）で森林監守（判任官十等）として勤めている。

「女子教育の先駆者下田歌子女史の実践女学校の経営に協力した」とも、「下田歌子女史の実践女学校に關係し、大人も同校の舎監となつて尽力した」とも伝わる。稲垣の著作『自強衛生健康法』の自序には、「予昔日は昼夜兼業にして最も塵埃多き紡績工場の工務に従事する事十二ヶ年四ヶ月間遂に一日の欠勤もなく勤続し又に中年にして寒氣峻厳なる北海道に十四年間養牧に教育に従事経営し間も遂に一日否半時も寒氣に当りたることもなく」とあるので、紡績工場に十二年四か月勤務し、北海道で十四年間養牧と教育に従事経営していた、と考えて良いであろう。

『濃飛人物と事業』は、当時の美濃と飛騨地方に関連する偉人伝を収載したものであるが、ここに「私立北見女学校校長 稲垣吉

慎君 現住地 北海道北見国網走町桂ヶ岡」として以下の経歴と賛辞が載り、事業成功者の一人として紹介されている。

深山大沢尤物多し。我東濃多く傑物を出せり。現北見女学校長稲垣君の如き其一人也。

君は、恵那郡岩村の人、安政二年七月岩村藩士七右衛門氏の長男に生る幼にして藩の文武所に入り、習字、漢籍、柔剣術等を学び、年十五、軍事学寮に洋式軍学を修め、其後志を育英の事に用ひ、明治九年本県師範学校を卒業、同十五年に至る間、訓導として小学校に教鞭を執れり。然るに君の向上的努力主義は、到底山間の一小学教員として齷齪するを快しとせず、蹶然其職を辞し、不圖を懷ひて東都に至り、東京紡績会社に工務係技師たること十数年、又農商務省小林局判任御用係たること三年後帝國婦人協会、大日本婦人教育会事務主任となり、其創立と経営とに貢献し功績多し。明治三十七年二月渡道、北見国斜里郡山別村字小清水に農牧場五百六十四町を拓き、四十三年地方教育の現状に憐焉たるものあるを歎じ、現住地に、北見女学校及び桂ヶ岡幼稚園を私設し、爾来私財を投じて、専念其経営に力め、今日の盛を致せり。君為人、和毅厚樸、平居情容なく身体頑健、二六時中瞬時も憩ふこと無し、蓋し君の健全なる事業は、此健全なる身体の生みし賜なるべし。

右に拠ると、下田と同じ旧岩村藩藩士の出身である。藩校・知新館で学んだ経歴から、おそらく下田の父・録蔵とも旧知の関係

であつたのではないだろうか。そのような関係が下田との信頼関係をより強固にしていたと思われる。下田の実践女学校経営や大日本婦人協会設立に協力するなど、稲垣は下田に全面的に協力しているが、そこに下田の志への共感とともに、強い同朋意識が働いていたことは確かだろう。

二 小清水への入植

やがて、開校した北見女学校は『北の文庫』(第20号)「新聞に見る釧路地方公共図書館の発達―明治期―」一九九二(平成四)年五月には、

網走町には二個の名物がある。Ⅰは網走図書館であつて、Ⅱは私立北見女学校である。^注と記されている。

同じく『北の文庫』(第21号)「新聞に見る釧路地方公共図書館の発達(2)―大正期Ⅰ―」一九九三(平成五)年五月)にも、

網走町民の誇りとするものあり、三眺山の風光、北見女学校、網走図書館、即ち是れなり、網走を観察するものあれば必ずこゝに之を導き、若し之れを見ざらん乎、共に語るに足らずと為す、以つて如何に網走町民の誇りと為し居るかを知らに足らん。^注

と明記されるほどの隆盛を誇るに至る。
前掲した稲垣の著作『自強衛生健康法』の自序に、稲垣自身が

北見女学校を開校するに至る経緯を、当初、紡績工場に勤務していたのだが、一九〇四(明治三十七)年、渡道して小清水(当時の斜里郡止別村)に入植し、牧場を開いた、と記している。

では、稲垣はどのような経路で、本州から小清水村の入植に至つたのであろうか。当時、一般的には本州(船)函館か小樽(船)釧路(船)釧路川沿いを上流へ(弟子屈(陸路)山越え、あるいは(船)宗谷海峡を回り、網走か斜里へ上陸(陸路)内陸へというルート)を辿っている。青函連絡船が就航する一九〇八(明治四十一)年以前のことであり、北海道内の鉄道整備状況も、次のような形で整備されていつたのである。

・一九〇七(明治四十)年 旭川(船)釧路間(函館から旭川間は開通済)

・一九一〇(明治四十三)年 池田(船)野付牛(現、北見市)間

・一九一二(大正元)年 野付牛(船)網走間

右記の鉄道が開通するよりも前の時期のことと、整備されていたとは言いがたい。おそらく稲垣は夫婦で、東京から小樽を経て定期船で網走港へ渡航し、上陸して小清水の牧場へ入植したものと考えられる(「網走新聞」桂ヶ岡物語④)。一九一一(明治四十四)年「小樽から網走まで行くには一週間に一回しか船が出帆しないので、五日間小樽に泊まり七日かかって網走に着いた。」あるいは「徒歩と駅通の馬で小清水へ到着した。」(前掲『小清水を拓いた人々』との証言や山形県余目町(子)清水まで二十日間を要したとの記録(『新小清水町史』)から推測するに、一か月ほどの日数を

ゆうに要したのではないかと思われる。

『新清水町史』^{※10}に拠れば、小清水町には数千年前から先住民族が暮らしていた形跡があるが、アイヌの人たちの居住の記録は一八七七（明治十）年を初めとしている。この明治初年に狩猟をしつつ小清水町に来住し、家を構えたのが男山イヤトムタ（通称ヤイトメ）である。温厚な性格で、一八八六（明治十九）年和人の定住が始まるが、すすんで入植者の世話をし、開拓当初の入植者でヤイトメの世話にならなかつた者はいないという。アイヌ時代と和人の時代を繋いだ人物である（一九二五（大正十四）年逝去、神浦神社境内に「男山伊弥登牟多主命」の碑が建つ）。やがて、一九〇二（明治三十五）年山田慎が「山田牧場」を開業するや、開拓営農を目指す農民と関連する職人らが止別原野に入植を始めている。一九〇一（明治三十四）年から一九一二（明治四十五）年の間に一一七名が止別村に入植している。稲垣の名は、一九〇四（明治三十七）年に藤枝看取と共に記載がある。一九〇六（明治三十九）年には、馬匹業（佐々木林右衛門）のほか越後団体（五人）、富山団体（八人）など団体での入植者も見られる。一九一〇（明治四十三）年のアイヌの人たちを含めた戸数は一二一、人口は四八九人（男二七〇人、女二一九人）であった。

こうして入植した稲垣は、数年後には「斜里郡の牧場は、止別村の野坂良吉と稲垣吉慎の経営するもの」と称されるほど事業を拡大するに至っている（図一）。また、その規模について『北見繁栄要覧』^{※12}には、

・斜里郡止別村 野坂良吉 八四五町六反三畝七歩
同 稲垣吉慎 一〇一町五反一畝

であったと記録されており、「是皆貸付の後ち無償付与せられたるものにして、形式的ながらも相当の成功せしものなり」と述べられている。一九〇五（明治三十八）年から一九〇八（明治四十二）年まで、定員二人の小清水町総代人の一人に選挙により選出されているため、入植後の短期間で地域に根づき、人望も獲得していたと推定されよう。

三 入植の時代的背景と状況

ここで、入植の時代的背景と入植時の状況を確認したい。

一八九七（明治三十）年「北海道国有未開地処分法」の施行により、国有未開地（止別原野）の払下げが始まる。移住者には汽船賃、船賃を割り引くほか、無償貸付、無償付与方式がとられた。しかしこのことは、資本家による大農場・大牧場の出現を招き、小作人を流入させる結果となった。そこで、一九〇八（明治四十二）年「北海道国有未開地処分法」改正新法では、大地積は売却制度を導入し、自作農移民保護のため特定地制を設け、無償貸し付を継続した。自作小農は、事業成功後、無償で付与するとした。特定地貸付は、許可された翌日から六か月以内に現地、またはその付近に移住し、成功するまで居住することを条件に五町歩（約五ha）、土地の地味の状態によっては十町歩まで貸付し、成功す

道長官と折衝を重ね、実際の貸付名義は七人である（【表1】参照。なお『小清水を拓いた人々』は、一九〇三（明治三十六）年六月「北海道国有未開地処分法」第三条を受けた明治三十六年十月三十一日現在の台帳によるとして、本多由太郎名義の箇所は東京麻布区飯倉町・杉村好一郎と見えている。さらに、斎田廸を竜由廸、立木司埜三郎を立木司栄二郎と表記している。）

字小清水―三名（東京市在、北川・斎田・〔第一銀行頭取〕池村）

字浦土別―一名（東京市在、清水）

字止別―三名（東京市在、立木。岐阜県恵那郡〔阿木村飯沼〕在、本多由太郎。三重県在、奥田）

②一九〇三（明治三十六）年 下田歌子は開効社農場（開効社下田牧場、下田牧場、開効社牧場、小清水開効社北見牧場とも）現地管理人として、稲垣吉慎を入植させ、採草地二か所を開墾、運営させた【図1・2①・2②・3】。

③一九〇五（明治三十八）年 稲垣は釧路、根室から馬を購入して放牧し、山桑で蚕を飼育し、在住農家に奨励。さらに、郷里の美濃国（現在の岐阜県）に移民を募り、また道内からも集める（第一陣は、明治三十八年五月大工職稲川鎌吉、木挽職鈴木弥蔵ほか。第二陣は、明治三十九年四月馬匹業佐々木林右衛門、西村七五郎ほか。第三陣として農業伊藤藤五郎、小木曾莊市ほか。第四陣として、明治四十年春農業佐

藤政太、小出弥平ほかであった）。

④一九〇八（明治四十二）年 成功検査の結果、共和地区内の一部と旧三共農場の二地区のみが合格し付与された。残りの広大な貸付地が不成功地処分を受けたため、学校の名誉にかかわることを恐れた下田は、付与地を稲垣吉慎個人の名義に変更し、「稲垣牧場」と改称した【表2】。

⑤その際、下田に関する文書を全部焼却、下田の名前は終始表面に出ないようにしたという。このことは、山下長吉の忠告ともいう。

⑥その後、下田名義の山林（不成功地は日本競馬会に売却し、手付金六千円を得る）と農場地を池田七郎に売却し、稲垣は自身の配当金を網走の「私立桂ヶ丘（北見）女学校」の建築資金に充てた。結果、網走支庁管内における女子教育に先鞭をつけることになった。

④の改称に関わる下田の行動は注目すべきであるが、これを直接裏付ける資料は現時点で確認できていない。しかし、『新小清水町史』には、開効社牧場地の不成功地の引揚処分のうち、約三七五haが「大野牧場」となり、一九〇八（明治四十二）年に西村七五郎が不成功に終わっていることを伝えている。その際、管理責任者は、先にあげた本多由太郎であった。また、同じ開効社牧場地の不成功地の引揚処分のうち、約三三〇haは「若王子牧場（屯田兵の高木栄太・常吉が若王子文健子爵名義で山林を牧野に

し、産馬と乳牛の飼育により成功付与を受ける」となり、一九一八（大正七）年払下げを受けた。管理責任者は山下長吉であった。稲垣が入植し開いた「開効社牧場」のうちの不成功地の一部分は、下田、稲垣の両名と同郷の出身者が管理責任者となって受け継いでいたことは見逃せない事実であろう。

四 下田歌子と稲垣吉慎

こうして、稲垣吉慎は網走へ移り、北見女学校を開校することになる。ところで、前述したように「下田歌子女史の実践女学校に關係し、大人も同校の舎監となつて尽力した」と伝わる。それを証する一次資料は極めて少ないが、以下からその關係性が認められる。

下田の自撰著作集『香雪叢書』は、第一巻に「よもぎむぐら」と題して紀行・隨筆を収載している。その中の「北海紀行」（一九〇一（明治三十四）年七月三十一日〜九月一日）は、下田が講習会での講話と遊説のために北海道を訪れた折の紀行文としても興味深い著作であるが、ここに稲垣に関する記述が残されている（傍線を私に付す）。これに拠れば、稲垣は北海紀行の道中、下田一行に先んじて各訪問地の關係諸氏との連絡他、いわば渉外係として奔走していたと思われる（『下田歌子先生伝』一九四三（昭和十八）年は、遊説員としている）。

・札幌なる教育会にて夏季講習催さるゝ、同じくは會員諸子の

会合の序に一日だにもと請はるゝ、其へえ辞退いな難くなりて承け引きつ。会の事務員稲垣吉慎は、此の行に先立ちて行きつ。

・室蘭港に着きて丸一が店に憩ふ。こゝには札幌女子高等小学校長小林到氏、かねて我等を待たれ居り。夜もまだ深ければ、枕とりいでゝしばしまどろむ。稲垣は一番汽車にて札幌にむかひ、我等は二番にて出で立たんとす。

また、一九〇二（明治三十五）年二月に現在の大阪府富田林市小楠公墓所に「楠公夫人顕碑」が建立された際に、稲垣はこの除幕式に男爵・華族女学校校長細川潤次郎や下田、実践女子工芸学校校長・青木文造とともに列席している。この顕彰碑は、細川潤次郎が「楠公夫人碑」の題額、（華族女学校学監従四位）下田歌子の撰文、若林常猛の書になる方九丈の自然石によるものであった。その除幕式を伝える記事は、稲垣の肩書を「帝国婦人協会幹事」としている。これらのことから、稲垣は帝国婦人協会に事務・幹事として尽力していたと考えて良いであろう。そして、この二、三年後には稲垣自身は小清水地区に入植し、牧場を開業、やがて売却してその資金を元手に女学校を開校するに至る。

下田の『北海紀行』には、「北海道の汽車路行く程は南米の旅旅ゆと人の言ひける、げにさる事とは覚ゆれど」など、当時の北海道を汽車で移動する様子が記されているが、この時点で汽車は旭川までしか開通しておらず、下田は道東方面を訪れることはできなかったと思われる。しかしこの訪問では、下田自身が「女子の

就学者の比較的多数なるは、まことに悦ぶべきことなり」という実感を得ており、実り多いものであったことは確かなようだ。

この訪問は、福島―仙台―青森―函館―室蘭―札幌―小樽―旭川―札幌―室蘭―函館―青森―仙台―福島と辿る大掛かりな旅であった。あらためて下田の強い熱意が窺われる。特に北海道各地では、日本婦人の心得や女子教育について講話を行っている。繰り返しになるが、この旅は、札幌教育会の夏期講習へ出席する目的であったが、帝国婦人会の会員数拡大と同時に、『北海紀行』に「かねて会長岩倉公夫人より頼まれまゐらせし愛国婦人会の事語りて、更に有志諸氏が催さるゝ茶話会に列す」という記述があるように、愛国婦人会の協力活動としての側面も有していた（後に帝国婦人協会会長下田歌子は、一九二〇〈大正九〉年愛国婦人会第五代会長に就任している）。

「北海道毎日新聞」（一九〇一〈明治三十四〉年八月五日）は、以下の下田来訪の記事を載せている。^{注18}

三十四年八月五日来札した下田歌子は、北海道教育会第一四回夏期講習会に招かれ、会場である札幌女子尋常小学校において家政学を講義した。はじめて来札の歌子は、引っぱり風で区有志や月寒の第二五聯隊の将校夫人等の招きで女子教育に関する演説を度々行い、女子が積極的となつて国家のために富を作ること、そのためには勤儉貯蓄につとめること、女子の手の器用さを活かして手芸、造花、編物を奨励すること、精励勤勉につとめ国を富ます方策等について熱心に説いた。

また、下田の夏期講習会における講義内容や各地での講演内容は、同年北海道教育会より『下田歌子先生家政学講義』として刊行されており、「女子学術講義」第1巻第1号（女子講学会、明治三十六年二月）には、高評につき再販の広告が見えている。

さらに「下田歌子来札を機会として、帝国婦人協会札幌支部事務所を北一条西三丁目北海道教育会内に置く」が、九月二十一日発会（午後一時より女子高等小学校内に於て発会式を行う）した。支部長に大迫とき子（大迫尚敏第七師団長夫人）、副支部長に佐藤陽子（札幌農学校長佐藤昌介夫人）、理事に大窪はる子、大島信子、安部安子、藤村晴子、評議員に谷くに子（谷七太郎夫人）、莊司とよ子（莊司斌夫人）、阿部恒子（阿部宇之八夫人）などであった。入会者は特別・賛助・通常会員など合わせて二〇〇余人にのぼった」と「北海タイムス」は伝えている（一九〇一〈明治三十四〉年九月十八日〜十月十七日）。^{注19}

この盛況ぶりは好意的に北海道内に大きく影響したようである。例えば「婦人」と^{注20}こどもは、「会報・北海道通信（通信員）」（一部を除き、フリガナは私に省略した）に以下のように記している。

○女子教育の景況 本道は一般に女子教育は進歩せざりしが、^{やうく}漸々高等女学校の設立を見るに至り特に客年下田歌子先生のはるく本道に來られて女子教育の為に諸所に講演などありてよりは、一層斯の道の隆盛を見るに至れり、尚笈を負ふて東都に出でんとするもの続々たるは本道の為に慶賀すべきことなり。

後にも「北海タイムス」は、「札幌支部の活動は、月例会で女子の修養に関することを学習することが主であった。三十六年八月には来道中の鳩山春子や下田歌子の講演会が開催され、来会者は各四、五百人にもものぼった」とその盛況ぶりを余さず伝えている（一九〇三〔明治三十六〕年八月十六日～二十八日^{注21}）。これらの記事のことを考えると、下田に限らず女子教育の先駆者を北海道に招き、さまざまな話を聞きたいという要請が北海道各所にあつたものと判断されるだろう。実際に、後の一九〇六〔明治三十九〕年の同誌（四月十日）には、「同会札幌支部は、三十九年四月段階で会員はおよそ一〇〇人、ほとんどが愛国婦人协会会员をも兼ねているというのが実状であった。同月、愛婦への協力事業が一段落したので、本来の会のあり方に戻って、帝国婦人協会の発展のために毎月講話会を開催して知徳を磨くこととした。このため適切な講師を招いて料理法、裁縫等の講習会を開き、女性に必要な技術の修得^{ついで}につとめることとし、広く会員を募集した^{まね}」とあり、下田の精力的な活動が実を結んでいく様が見て取れる。

一九一八（大正七）年五月末時点での愛国婦人协会会员数を示すと以下のようになる（『網走市史下巻』^{注22}【表3】）。道東方面では、網走地域が最も会員数が多く、総会員数は千名を超えている。その後、一九三三（昭和八）年段階の纏めでは、網走町役場内に事務所を置く「愛国婦人網走委員会」も文部省指導下で活動している（会員数四百名、代表・山内トメ。同右書）。

【表3】愛国婦人协会会员数

愛国婦人会（大正7年5月末）

町村名	三等 有功章会員	特別会員	普通会員	計
網走	1	107	70	178
斜里	—	26	41	67
美幌	2	10	114	126
野付牛	1	22	65	88
置戸	—	2	19	21
武華	—	8	54	62
常呂	—	8	25	33
佐呂間	1	1	29	31
上湧別	1	2	82	85
下湧別	—	6	39	45
紋別	1	23	57	81
渚滑	—	4	75	79
興部	4	9	67	80
雄武	1	10	39	50
計	12	238	776	1,026

小清水への入植と「開効社牧場」としての開拓に実際の程度下田が関わったかは、現時点では詳らかではないが、『北海紀行』に拠れば、この旅の全行程に稲垣は同行していたとみられる。稲垣は下田の代弁者として、下田が行くことがかなわなかった網走や小清水への道を開いたのだろう。下田が北海道の地で説いた、帝国婦人協会の意義と女子教育の必要性は、稲垣の心に火を灯し、その情熱に感化されて、道内でも交通の便が悪く、教育機関も充分整っていなかった道東方面の女学校の設立と帝国婦人協会の普及のために全力を注がせたのではないか。もちろん、稲垣以外に

も、下田の講演や著作に影響を受けていた道東の女性たちもいたことだろう。それが愛国婦人会会員の増員へともなっていたと考えられる。

五 北見女学校開校

一九一〇（明治四十三年）四月一日、「管内の中等教育は、一九一〇（明治四十三年）年網走に開校した北見女学校が初めての学校（ママ）であるが、これは裁縫を主とする上流階級の花嫁学校であつた」とされる管内初の女学校が誕生した。

当時、網走管内に女子教育の施設がないことを憂えた稲垣は、牧草地を売却し、得た資金を建設資金に充当して女学校を開き、自ら校長となり北見町南通一―四二に仮校舎を建てた。開校にあつては、「管内各地を巡回して女子教育の必要性を説き、有志の出資協力を懇請するとともに、一口三十銭・二千口の学校永続講を設けて経営費にあてた」という。前述したとおり、当時の北見国の海岸地方の先進性に比較すると、内陸地方に屯田兵が置かれたのが一八九七（明治三十）年で、道内中においても、後発の「新開地」であり、義務教育も完全ではなかった。資産家の男児ならば他地方に遊学することもあったようだが、十三、四歳以上の女子にいたってはこれも容易には望むべくもなかった。そのような状況下にあつては、女学校設立の必要性は高く、かつ急務でもあった。そこで、管内有志も大いに賛同しその維持を助け、開校

に漕ぎつけたものと思われる。因みに、一九一三（大正二）年時点で、道内の公立学校のうち、高等女学校は函館、札幌、小樽、上川の四校、他に区立・町立の女子職業学校が四校、私立の高等女学校が二校、女学校が十二校（含、北見女学校。休校二校）である。

さらに、翌一九一四（明治四十四）年三月に第一回の選科卒業生六名を出し、五月には道庁長官の認可を得ている。そこで能取官林から用材の払下げを受けて、公園予定地の桂ヶ岡に二階建木造校舎ならびに寄宿舎を建築し、十一月に落成した。土地の選択と取得には貴田国平（百川）を煩わせている。オホーツク海をのぞむ丘陵地桂ヶ岡は、もと近世アイヌ文化期の築造とされる内外二重の堀で囲まれたチャシ（砦）があつた地域であつた（一九三五〔昭和十〕年十二月史跡名勝天然記念物指定。【図4】）。

貴田国平は、明治三年山口県出身で明治三十五年から大正六年まで町会議員、大正九年から昭和十一年まで道会議員を務めた、いわば網走の名士であつた。網走築港や鉄道の実現に尽力し、道立中学校の設置、道路、橋梁の築設に努力した人物である。北見女学校設立の事情を、後年貴田は、以下のように語っている。

稲垣が女学校を建設したことは北見で女子教育の先鞭をつけたもので実に偉い者じゃ、アノ桂力岡の校舎のところは全くの未開地で誰も手をつける者がなかったが、ある日のこと稲垣君が僕のところへやつて来て「アソコへ女学校を建てたいから何とかして敷地を求めることができぬじやろうか」と

いうからして「よろしい、僕が引き受けるから君が入用なだけ切り開いて校舎を建てたまえ」といつてやつたら稲垣君は非常に喜んで、それから早速稲垣は無頼でアノ傾斜地を切り崩して敷地を作ったものだ(『網走新聞』桂ヶ岡物語④)。

こうした貴田の協力もあつて、未開地の沢に管内初の女学校は小学卒業以上の女子を収容する学校として開校に至った。選科、本科、補習科に分かれ、このほかに一九一二(明治四十五)年五月には付属幼稚園も開設している【図5①・5②・6】。生徒の多くは、網走、野付牛、紋別方面から入学し、卒業生は「成績頗ぶる良好なり」、「学校の特徴とするところは教師と生徒とは宛然一家庭にあるの思ひあらしめ儉素質実を旨とし浮薄に流れ豪奢に渉るが如きことなからしめ、経費は一ヶ月食費舎費月謝及び小遣銭合せて、月額僅かに六円以内にて、弁じ得べしとなり」^{注29}と伝わり、当時の学校の有様を知ることができる。因みに、一九一〇(明治四十三)年の巡査の初任給は十二円だったという。

「教師は校長一名、学科教師一名、裁縫教師二名、保母一名、舎監一名、嘱託教師四名にして現在入学生徒数は選科四七名、本科一三名、補習科一二名計七二名」^{注30}であつた。なお、明治四十五年度新学期からは入学生激増により一二三名となる盛況を呈している(前掲『北見之富源』。東京(あるいは実践女学校)から二名の教師を迎えたとも伝わるが、詳らかではなく、わずかに「裁縫雑誌」一九二三(大正二)年に「北海道北見国網走町桂ヶ岡私立北見女学校 吉田はつ^{注31}」及び一九一六(大正五)年「同 西尾こと」^{注32}の

名が確認できるにすぎない。学科は、「修、国、家、裁外三」である。^{注33}こうして「女子教育界における北斗の樞星たるべきなり」と称された北見女学校ではあつたが、各種統計書から、生徒数などの推移を見ると、一九一五(大正四)年度をピークにして徐々に生徒数が減少していくことが見て取れる【表4】。

経営難に陥った稲垣は、同年町営を要望し、九月二十六日有志大会が開かれたが決せず、十月四日再度の有志大会にて「網走女子職業学校」と改称することに決まった(『高田源蔵日記』。稲垣から月二〇円で借り受け、経費一、三〇〇円、収入四〇〇円、残額九〇〇円は町の支出としたが、「稲垣氏の存廃随意に任せる事」(同右)となり、一九一七(大正六)年四月、稲垣は網走を去ることになった。^{注35}

後、北海道庁立網走高等女学校が一九二二(大正十一)年三月(一九四四(昭和十九)年まで)に設置認可となり、四月旧北見女学校において授業が開始されている。この校舎が取り壊されることなく継続使用されたことは、何より当時先覚的な建造物であつた証拠であろう。そしてこの庁立女学校設置に際しては、旧北見女学校の前歴があつたことから、無条件に認められたという。^{注36}やがて北海道立網走女子高等学校を経て、北海道立網走向陽高等学校(一九五〇(昭和二十五)年から二〇〇七(平成十九)年まで)、北海道立桂陽高校(二〇〇八(平成二十)年から現在まで)へと北見(網走)地方の学校教育は発展している。時を経た現在までも、北見女学校の存在した意義は失われてはいないと言つて良い。

【表4】 北見女学校生徒数等の推移

	発行年	和暦	学級数	教員数		生徒数	入学者	卒業者	本年度収入総額(円)			本年度支出総額(円)		
網走町・能取村・藻琴村統計表	西暦	和暦		男	女	女		女	授業料	その他収入	計	経常費	臨時費	計
北海道庁統計書 第二十六回第三巻	一九二二	大正元				38								
(学事之部) 大正三年度	一九一六	大正五	3	1	2	42	23	7						
北海道庁統計書 第二十七回第三巻	一九一七	大正六	3	1	2	35	10	10						
(学事之部) 大正四年度	一九一七	大正六	3	1	2	35	10	10						
北海道庁統計書 第二十八回第三巻	一九一八	大正七	2	2	2	24	—	7	240	420	660	660	—	660
(学事之部) 大正五年度	一九一八	大正七	2	2	2	24	—	7	240	420	660	660	—	660
北海道庁学事統計要覧	一九一八	大正七	2	2	2	24	5	7						

六 その後の稲垣吉慎

北見女学校閉校に至る頃から、その後の稲垣について述べたい。
 学校経営がピークを迎えたと思われる時期、一九一四(大正三)年十一月二十五日の「官報」に拠れば、稲垣は石炭処分の試験許可を得ている(北見試験登録第276農商務省、網走郡網走町 稲垣吉慎)。また、一九一五(大正四)年十月十一日の「官報」に「北海製紙合資会社」(九月二十七日)設立の記載があり、目的は葦原料のパルプの製造製紙業で、「代表社員 稲垣吉慎網走郡網走町」(他に四名)と記述されている。これを初出として、大正五年七月^{注38}、大正五年十月、大正六年七月、大正六年十月、大正七年十月、大正八年十月^{注42}、大正九年十月まで連続して代表委員社員の一人に稲

垣の名がある。学校経営のかたわら、豊富な北海道の資源を開発し、事業を行っていたと判断される(「高田源蔵日記」には葦原料のパルプの製造の事業に関して関係者から話を聞く記録がある)。この事業から得た資金を学校経営に充当する目的であったか否かは不明であるが、少なくとも一九一七(大正六)年に網走を去ったあとでも継続して関わりあったと判断して良いだろう。

稲垣の足跡を探る。一九一七(大正六)年五月に武庫郡西宮で開催された「西宮考古資料展覧会概況」に河内国府発掘の人骨が展示されているが、比較資料として現代日本人の頭蓋の出品もあった。その際に稲垣はアイヌ人の頭蓋を出陳して三者を対照させ、骨格の相違を認識させることに一役かっている。「最も覚者の好参考となりたり」と記録は伝えている。^{注44}このころ、稲垣は現

在の兵庫県西宮市香櫨園に居を移している。一九二四（大正十三）年伊勢神宮の唯一のご料酒に選ばれた、灘の清酒「白鷹」の蔵元、白鷹株式会社辰馬悦蔵（三代目一九二〇—一九八〇）は、京都帝國大学で考古学を志し、考古学会の草分け的な存在として知られる。やがて「（財）辰馬考古資料館」を創設するほどに私財を投じて収集と保護にあたったことで知られる人物だが、稲垣宛の差出書簡（大正十年二月十六日付）が残され、交流が認められることから、これは考古学を通じての親交であつた可能性があると思われる。⁴⁵

また稲垣は学校経営にも携わり、兵庫県武庫郡甲東村仁川の「私立小学甲東学園 銀星女学院」⁴⁶の主事を務めた。北見女学校校長の前歴から、女学校主事として着任したものと思われる。

銀星女学院の設立者、羽室庸之助（一八七六—明治九〇）年九月、一九四四（昭和十九）年十二月）は、米子埴塙（松）取締役、日本水道衛生工事（株）監査役、銀星女学院院长、羽室鑄銅所長。『人事興信録』⁴⁷には、「君は兵庫県土族羽室義行の長男にして明治九年九月を以て生れ同十九年家督を相続す同二十三年東京高等工業学校機械科を卒業し私立中學鳳鳴義塾教師となり農商務省製鉄所に入り独逸に留学す後住友製鋼所副支配人となり又衆議院議員に擧げらる現時羽室鑄銅所長にして前記会社の重役を兼ね銀星女学院院长たり」とある。「不埒極まる学校営業」（一豊生）として入学金等に関する監督官庁当局の一考を促すための以下の記事から、この学校の概要を窺い知ることができる。⁴⁸

私立 小学甲東学園

同 銀星女学院

同学園は、阪急電鉄、西宝線（西宮北口と宝塚との中間）仁川停留所の南方約二丁、青松の間に校舎を新築し、本年（大正十四年—稿者注）四月十日開校式を挙行した。同学院の設立者総代は大阪の羽室鑄銅所所長である羽室庸之助氏で自ら院主となり、名誉校長として大阪梅花高等女学校校長伊庭菊次郎、主事に稲垣吉慎の両氏を推し、他教諭嘱託教師数名を聘して授業を開始した、現在生徒は小学校女学校本科一二年専攻科を合わせて約三十余名、何れも所謂別荘生活のお嬢さんのみであつて、同学院は主義方針として鳥渡面白い所はある、けれども中産階級以下の女子を教育することはできない一つの欠陥がある。殊に小学校は普通国民教育なるに拘らず、次記に掲ぐる不当の入学金、入学調整費、授業料、剩さへ維持費の支出は普通の家庭として迎も負擔に堪へられぬのである。同学校の学科目は小学校は小学校令に依る普通国民教育、女学院は本科、専攻科の二つに別れ、本科は高等女学校程度にて修業年限五ヶ年、専攻科は高女卒業者及び同等の学力あるもの修業年限二ヶ年（家事、音楽、外国語）となつて

いる。

一九三〇（昭和五）年『兵庫県統計書 上巻』には、「私立銀星女学校」は学数五、教員（邦人）男三人・女五人、生徒（邦人）一人、卒業者九人、入学者（第一学期）五人との調査内訳の記載がある。⁴⁹

さらに翌年、稲垣は、一九二六（大正十五）年六月二十九日設

立の「日本蘭土金山株式会社」（大阪市東区北浜四丁目二十一番地）の監査役を務めている。目的は、「鉱物の試掘採掘製煉及び鉱産物の売買其他之に附帯する事業」、住所は兵庫県武庫郡大社村（現在の兵庫県西宮市）とある。網走で石炭産業に関わった実績を評価されての就任に至ったのではないだろうか。しかし、間もない「官報」第60号（昭和二年三月十五日）には「監査役稲垣吉慎 大正十五年九月十九日死亡」の報が載る。銀星女学校の校地設営の際の事故とも伝わるが、詳しくは不明である。

享年七十二。波乱に富んだ人生であつたと言えようが、稲垣も女子教育の重要性に目覚め、その実現のために大きな足跡を残した人物であつた。そこには明らかに女子教育の先駆者下田歌子の影響があつたのである。

まとめ

かつて短期間ではあるものの確かに存在した「北見女学校」についての沿革を調査し、学校主であつた稲垣吉慎の人生を追った。下田歌子とこの女学校とのかかわりについては、一次資料の破棄等の事情もあつたとも伝わるため、ほぼ残されてはいない。しかしながら、「稲垣翁の桂ガ岡女学校の設立に女史の偉大な協力があつた」（「網走新聞」桂ガ岡物語③）や「下田が、実践女学校の基本財産に充当するため、北海道に国有未開地の払下げを計画した」（「下田女史や貴田国平らの協力を得て」との記述からは、間接的ではあるが、下田の関与を明らかに認めることができる。

下田が北見女学校設立を祝える和歌を残し、それが稲垣家に伝わっていたことが「網走新聞」に報道されている。その記事に拠ると、以下の一首であつた（記事ママ）。

桂力岡といふところに北見女学校の設立せられけるを
悦びて

従三位 歌子

文学ぶまことの光のそはざらむ さきの桂もるひなからまし
また、同じ記事にあわせて載る一九一五（大正四）年の稲垣自詠の一首には、周辺地域（あるいは生徒や関係者もふくまれるか）から還暦を祝ってもらう感動が込められている。

桂力岡にちなめる歌と雅名桂□（陵）翁の郷里石村古城下
水野良治家の屏風に

もろ人の情も高き桂力岡に本卦かえりを祝う嬉しき

大正乙卯（四年）桂陵翁書

また、稲垣夫妻（妻・ぎん）の金婚式記念の袱紗には川端玉堂画の「月に兔」が描かれ、下田の一首、

まどかなる月のうさぎもくれ竹の 世のあだ波も安くこゆらん
が染められていたという【図7】。

北見女学校が、旧北見国中で初めて設立された女学校であることとの意義は大きく、北見の教育界に残した稲垣の大きな一歩は称賛に価する業績であつた。一九四〇（昭和十五年）年ごろ、頌徳碑建設の議がおこり、建設地を北見女学校があつた網走町桂ガ岡と定めて計画が進められたが、時局関係で実現をみなかつたという。学校地近くの桂の古木を愛し、「桂ガ岡」の命名者となつた稲垣は

自ら桂陵と号した【図8】。この地を深く愛していたことが窺え、だからこそ退去は本意であつたのではなからうか。北見女学校閉校とともに北見最古の幼稚園も廃止されたが、稲垣は、一九一六（大正五）年には光輪寺で日曜学校を開いている。二回の参集者は六七名（一回目・二月十三日）、就学児童三〇〇名（二回目・二月二十日）と多数の参加者を集め、幼児教育への関心の高さを窺わせる。^{注57}あるいは、一時期は紳士録『北海道社交倶楽部』【図9】^{注58}に肖像写真と共に紹介された稲垣の、幼稚園廃止に伴う、忸怩たる思いが日曜学校の開催を実現させたのかもしれない。第一次世界大戦の好景氣を迎える時代は目前で、女子教育の必要性和就学・進学率が高まる時期が迫っているのだが、一九一七（大正六）年稲垣は網走を退去するに至つた。退去した四月二十九日は降雪

と時化の悪天候で大困難する中、停車場で見送りを受けている。^{注59}この時、稲垣の眼に映つた網走の風景と胸に去来したものは何だつただろうか。翌、一九一八（大正七）年には、網走聖公会付属愛香幼稚園が開設され、日本聖公会網走聖ペテロ教会として血脈を受け継いでいる。^{注60}

現在、北見女学校跡付近には、何代目かの桂木と「私立北見女学校」の記念石碑（網走市桂町勤労者総合福祉センター・ソレイユ網走駐車場前植込み）が残るのみである【図10】。^{注61}石碑裏の碑文は以下のとおりである。「明治四十三（一九一〇）稲垣吉慎は網走管内最初の私立女学校を北見町に開校した。翌年この地に木造二階建ての校舍を新築移転し、あわせて幼稚園も開設した。小学校卒業後の女子を教育する場としては管内唯一の学校であつた。」。

稲垣吉慎略伝と「高田源蔵日記」に見る北見女学校関連事項

西暦(年)	和暦(年・月)	事項	月・日・天候等	「高田源蔵日記」事項
一八五五	安政二・七	出身地、岐阜県美能国（ママ）恵那郡岩村町。		
一八七五	明治八	藩校知新館を終え、阿木小学校校長を務める。		
一八七九	同十二			
一八八七	明治二十頃	下田歌子の実家である平尾家を頼り上京し、鐘ヶ淵紡績会社に勤務。		
一八九九	明治三十二	下田の実践女学校創立に伴い参与となり、妻ぎんは舎監となる。		
一九〇一	明治三十四・七	札幌市の北海道教育会に於いて夏期講習会を開くにあたり帝国婦人協会会長下田歌子に先行して札幌・旭川・室蘭・函館を一巡した。		
一九〇二	明治三十五・三	実践女学校の基本財産に充当する目的で北海道において牧草地を払下げるため、井上角五郎の斡旋を得て渡道し、最初石狩国夕張郡の馬追山を選んだ。しかし、この地方の水田の創始者吉仁の古川孝平に、将来水田の水源地になるところだから、と反対されて止め、更に道庁に於いて図面上で止別原野小清水の約一里四方の未開地を選定し、直ぐに第一銀行頭取池村憲三ほか四名の名義を以って払下げ許可を受けた。		

一九〇三	明治 三十六・六	現在の共和一・二の一部と三の全域及び旧三共農場の全域にわたる広大な土地の無償貸し付けを受けた。		
一九〇四	明治三十七	夫妻同伴で「下田牧場（小清水開効社北見牧場とも）」に現地管理人として来住。同郷から渡辺弥十を呼び寄せ三人が事務所（北変電所付近）に居住。		
一九〇五	明治三十八	現中津川市から親族の大林業藤井辰造、従業員三島某の二名と、後に同郷の本多（田）由太郎を招致した。		
一九〇五 ～一九〇八	明治三十八 ～四十二	夏季に山桑は豊富に野生しているため、国産の養蚕を大々的に試育（ママ）した。更科鉄太郎、稲垣吉慎、塚本命助の三人が斜里村総代に選出される。		
一九〇八	明治四十一	一時飛騨国高山白川村の山下長吉が管理を代行したが、砥草原と三共農場の二箇所だけ成功して、他は引き上げ処分となったので、学校の名譽にかかわるとして稲垣個人名義に改め、「稲垣牧場」と称した。		
一九〇八	明治四十一	砥草原農場には多くの小作人が入っており、その監督に網走で知り合った小出弥平を頼んだ。小出は、小作の世話をした。		
一九〇九	明治四十二	小清水を引き揚げて東京へ赴き、再度実践女学校校長下田歌子の許に在った。やがて北見地方に女子教育を施す学校が無いことを憂い、網走に私立女学校を創設するため、網走に移転して、小清水の農場地を売却し、建築資金に充てた。	十二・四 晴 静海	稲垣ぎんさま来訪アル。
一九一〇	明治 四十三・四	仮校舎を開設した。	二・十七 晴	昨夜町長来宅稲垣氏の計画の中ナル女学校設立二付維持金トシテ各有志ヨリ劇（ママ）金ヲ願元資ヲ貰二アラズ年五朱の利子貰ヒ校資二当ル云々、相当の寄附願出アリ。
一九一〇	明治 四十三・四		二・十九 晴 寒サ甚敷	稲垣君今晚茶話会開催二付招待アレト（ママ）断ル。
一九一一	明治四十四	桂方岡に木造二階建ての校舎並びに寄宿舎を新築。	二・二十 晴	稲垣君の尽力ニテ私立女学校設立二付維持員募集本日も加盟ス。維持金トシテ六百円二対ス年五朱利子ヲ寄付申込ム。
一九一一 五・十五	同 五・十五	道庁長官の許可があり「北見女学校」として正式に開校した。	三・十八 昨夜 チラ／＼雪	北見女学校撰科六名卒業其他卒業証書授与式招待アリ出席ス。式後折詰アリ頂ギ生徒の手芸品陳列一見ス。
			十一・三 午後四時 小雨天長節	女学校開校式招待二付出席盛会ナリ。有志祝辞演説盛ナリ。

西暦(年)	和暦(年・月)	事項	月・日・天候等	『高田源藏日記』事項
一九二二	明治四十五 (大正)元		三・二十五 晴	女学校卒業証書授与式参列ス。卒業者二十人、折詰ニテ一杯頂キ帰宅ス。
一九二三	大正二		三・二十五 晴	女学校卒業式二付、午前参列ス。卒業者本課ニテ二人、幼稚院児童八人ナリ。
			十一・八 昨夜小雪 半晴	女学校内ニテ絵画会開催出席ス。折詰馳走アリ。青年諸士(ママ)の名画アリ。
一九一五	大正四	学校維持困難に陥る。	五・二十五 午前雨 午後晴レル	女学校記念日二付招待サレ居力処不参飯塚ヤ二行上方法承ル。
	同・六 同・十	町営移管を申し出たが、協議の結果、町で借り受け「網走女子職業学校」と改め、存廃は随意に任せることとなる。	六・十六 大ニ冷氣トナ リ小雨トナル	午後三時頃女学校二行、稲垣氏は迄経営致来リ心得共逆モ同氏の手ニテ及兼ルニ付、町へ挙テ提供シ能キ方法ニテ持続アラン事ヲ希望セリ。四十名生徒ヲ取扱道庁ヨリ三百円補助ト町ヨリ六百円補助ヲスルトセバ凡三百円ツ、年々町有志ヨリ寄付スレハ立派ニ維持出来ル趣ニ付其の事ニ集会者丈ニテ協議ス。
			六・二十七 曇午後二時頃 ヨリ 久ふり降雨ト ナル	今回紋別ヨリ茅ニテ紙ヲ製シ、其他食塩魚油製造総テ新發明有益の事業ニ付御話在之趣、稲垣氏廻章到来午後一時ヨリ出席ス。生憎不在勝人多ク、熊谷峰村両氏ト小生のみ。種々有益の御話ヲ伺上帰宅ス。
			九・二十六 晴 非常冷氣	午後ヨリ役場楼上ニ於有志大会アリ。一、御大典記念植樹の事。一、女学校買収の件。一、学校々舎建設の事、種々協議スルモ決定セズ。委員付託トス、小生委員当せん。
			十・四 晴	午後一時ヨリ町役場楼上ニ於、女学校買収の件小学校建増委員会ヲ開ク。協議の結果女学校ヲ網走女子職業学校トシ稲垣君ヨリ月二十円ニ借受ル事、校長小学校中田兼務、外二十五円三十五円、女教師兩人雇入惣(ママ)経費千三百円、内収入四百円九百円町ヨリ支出スル事、総テの事中田校長の依頼の事トス。

一九一六	大正五	<p>北見地方於ける女子教育の先驅となつた北見女学校は苦心の経営八年で廃校となり、稲垣は網走町を退去した。同地を「桂が岡」と名付け、その地付近の「桂ヶ岡公園」に、今日もその名を留めている。</p> <p>兵庫県武庫郡甲東郡仁川（西宮市）辰馬別荘に住み、同地に再び私立女学校を創建する。</p> <p>同校々庭地均工事の際、怪我をし、それが原因で九月十九日大阪医科大学病院に入院療養中に薬石効なく永眠、享年七十。</p> <p>小清水町開基三十周年記念式典にて「開拓功労者」として表彰される。</p>	二・十三 朝来又吹雪	<p>小学校は目下学校裏手地十六戸分買収ト決シ、右校舍八間半二十三間ヲ運動場ニ改造シ、新タニ教場ヲ新設スル事設計等は校長ニ依頼スル事ニ決シ散会ス。</p> <p>午後一時ヨリ役場楼上ニ於記念植樹、学校増築女学校買入の三件、特別委員会報告有志会開ク。種々議論モアリシカ結局委員会報告通り（中略）、学校問題は十五日延期。</p> <p>午後一時ヨリ役場楼上ニ於、学校改築女学校買入の協議会、委員付託の報告アリ、十三人参集。女学校買上先断然断リ、稲垣氏の存廃随意ニ任セル事。小学校は公園予定地へ移転論盛ナリシモ、極局存続宿題し緩々協議相決散会ス。</p> <p>光輪寺ニ於日曜学校本日ヨリ創立、吹雪の為太郎トキ不参、次良丈出席ス。本日は御話計ニテ止メ次回日曜ヨリ開始の由、参集者六七十名モ在之由。</p> <p>光輪寺ニ於日曜学校開催二回目、就学児童三百名計ナリト、驚クの外無之。</p> <p>稲垣御夫人来宅、学校ヲ先年教師ナル人ニ貸与、稲垣夫婦は監督ニ任シ改正致度云々御話アリ。深ク姓（ママ）質取糺御取計可然旨申上ル。</p> <p>女学校卒業証書授与式招待サレ候得共、出席見合。</p>
一九一七	大正六・四		二・二十 半晴 降雪	<p>稲垣君出発（引上の事）二際シ停車場見送り、昨夜ヨリ降雪今朝尚烈シク大時化、見送人大困難。</p>
一九一九	大正八		三・九 晴	
一九二六	大正 十五・八 昭和 二十三・十一		三・十八 晴	
			四・二十九 降雪時化	
			十・十三 半晴 長芋堀	
			十・十五 晴	

西暦(年)	和暦(年・月)	事項	月・日・天候等	「高田源蔵日記」事項
		出典…『小清水町史』小清水町役場、一九五五(昭和三十)年。『小清水を拓いた人々』小清水町、一九六八(昭和四十三)年。『調査報告No.3』一九六八(昭和四十三)年。『小清水ふるさと研究会』一九九六(平成八)年。『小清水町教育委員会第7次中期計画』小清水町教育委員会、一九九七(平成九年)年。『新小清水町史』小清水町史編さん委員会、二〇〇〇(平成十二)年。		「高田源蔵日記」(網走市図書館蔵)より抄出。

注

1

「網走新聞」昭和二十六年七月十日〜十四日に連載。記事の執筆者稲川阿尊(寅吉)は、明治三十八年美濃国恵那郡阿木村飯沼(現在の岐阜県中津川市)から小清水開効社牧場での農耕、養蚕のために稲垣が移民を郷里に募ったことに父・鎌吉、母ぎんと一家で応じ、やがて定住した。鎌吉は腕の立つ大工として知られ、現・小清水町内の神社仏閣、学校校舎、公共建築など主だった建物のほとんどが鎌吉の手になっている。「砥草原小学校」設立の実行委員も務めた。寅吉は、農業協同組合や、土功組合、網走バス株式会社の基盤をつくるほか、小清水町に多大な業績を残している(『小清水を拓いた人々』)。

2

『恵那郡史』岐阜県恵那郡教育会、昭和五十七年四月復刻再版発行、大衆書房、昭和五十七年。また、美濃国恵那郡飯沼町の「飯沼学校」の校長も務めている(『明治十四年 学校幼稚園書籍館博物館一覽表』文部省、明治十五年)。

藩校・知新館は廃藩に伴い廃校し、知新学校として一八七三(明治六)に岩村で初めての小学校が創設された。開校時の教科書も旧藩校時代のものが多く採用され、教員は旧藩士およびその家族であった。しかし「武士としての学問的素養を或程度生かせる職業の

3

求人には限りがあり、新たな立身の道を求めて遊学、就職をめざし転進していった(『岐阜県史 通史編近代中』『土族の社会学的研究』名古屋大学出版会、一九九五)との指摘がある。

4

川村俊雄「網走今昔」44、昭和二十九年十二月〜三十年二月「網走新報」連載。

5

桂陵翁稲垣吉慎、丸善株式会社大阪支店、大正十年七月。

6

大橋弥一、一九一六(大正五)年三月。

7

明治維新以前、下田歌子の実家平尾家は、岩村藩の儒官として藩校知新館に学を講じていた(『実践女子学園100年史』実践女子学園、平成十三年)。

8

「網走管見」第2732号、明治四十五年六月二十七日を再録。

9

「北見印象記(6) 女学校と図書館」第2827号、大正元年十月二十日を再録。

10

小清水町、平成十二年三月。

11

「北見之富源」貴田国平(百川)編、北見実業新聞社、明治四十五年四月。

12

菊池純二郎編、高田活版印刷所、大正元年十月。

13

『斜里町史』斜里町役場、昭和三十年四月。

30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14

注10に同じ。

当時後進的であった北見地方に屯田兵が置かれたのは一八九七（明治三十）年であった（『北海道教育史 第2地方編』北海道教育委員会、昭和三十三年三月）。

栗原元吉編、実践女学校出版部、昭和七年十一月。

『青年世界』第十年第四号、明治三十六年五月。なお、下田は「日本婦人」（第三十一号、明治三十五年五月）に「楠公夫人建碑のゆゑよし、並びに、夫人が伝記に就きての考証」を載せている。また、若林常猛は号・快雪、書家。明治二十一年華族女学校教授、晩年は、岩崎小弥太の美術顧問を務めた（一八四三—一九二二）。

『新札幌市史 第3館通史3』札幌中央図書館、新札幌市デジタルアーカイブ (<https://adeac.jp/sapporo-lib/table-of-contents/mp000030-100030/d100030>)。二〇一三年六月二十日閲覧。

なお、一九〇一（明治三十四）年八月八日の同誌「時論」には、来札した下田歌子の「女子教育」の記事が載る。

注18に同じ。

第3巻第3号、フレイベル会、明治三十六年三月。

注18に同じ。

注18に同じ。

網走市史編纂委員会、網走市役所、昭和四十六年三月。

『置戸町史 上巻』置戸町役場、昭和六十年八月。

注11に同じ。なお、仮校舎を建てた「北見町南通一―四二」の住所は、高田源蔵宅住所であり、家屋は現存している（米村衛氏のご指示、『細見北見市街地全図』明治三十六年一月）。

『精密調査市町村便覧 附分類官公衛公私学校所在地一覧表』森田公美、東京・国文館書店、大阪・井上一書堂、大正二年

注12に同じ。

注11、注23、ほか。

注12に同じ。

注12に同じ。

44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31

第11巻第5号、大正二年八月、「報（会員異動）」。

第14巻第2号、大正五年五月、「雑報（会員異動 就職）」。

『北海道私学教育史』昭和三十八年七月、『北海道教育史』全道編四（昭和三十九年三月）。

注12に同じ。

注11に同じ。

『北海道教育史 第2』第1（地方編第1）北海道立教育研究所編北海道教育委員会、昭和三十年六月。

高田源蔵は滋賀県（近江国犬上郡磯田村）出身。一八五〇（嘉永三）年～一九一九（大正八）年。文久元年藤野家に雇われ、明治十六年根室支店支配人、北見国東部四郡の同家漁場をも支配した。同二十六年大阪本店総支配人となり、全事業を総覧したが、同三十一年再来網、翌三十二年より定住した。（又十）藤野家は、北見国・根室国における漁業だけでなく、函館を拠点とした廻漕業、商業、倉庫業、旭川を中心とした牧畜業など多角経営を行う富商―一八七一（明治四）年、北見国の紋別・常呂・網走・斜里の四郡、根室国の標津・目梨郡の二郡、千島国国後郡の漁場持となった。当主・藤野四郎兵衛は（一八五一〈嘉永四〉～一九一〇〈明治四十三〉）慶應元年藤野本家（近江国に本宅を置いて、他国稼ぎをした商人）¹¹近江商人）を相続、北海道における各種事業を統帥。特に網走における事業は没年まで継続し、その開発と発展に極めて大きな影響を与えた。当時の北海道随一の大漁業家である。

『日本全国諸会社役員録』商業興信所。

『帝国銀行会社役員録』帝国興信所。

『日本全国諸会社役員録 下編』商業興信所。

『帝国銀行会社役員録』帝国興信所。

『帝国銀行会社役員録』帝国興信所。

『銀行会社要録』東京興信所。

『考古学雑誌』第9巻第11号、大正八年七月五日。

また、『熊の囀』（河合裸石、大正四年十一月）には桂ヶ丘を訪ねた雉彦子^{きじひこ}の記述が載る。「頻りに先住民族の用ゐし石器を欲す、藪中を探索して石匙一を得、之を與ふれば、子欣々然として愛撫之を久うす、坂を下りて宏荘なる北見女学校に刺を通じ、校主稲垣翁に会す、面談僅かに十数分、校舎を縦覧し、石斧の贈物をポケット深く収め、倉皇として去る」。当時、この地域には、アイヌ関連の遺物が遺されていたと確認される。北見女学校建築時に発掘された可能性もあるのではないだろうか。

岩村歴史資料館蔵。同館には、稲垣宛の下田歌子、後藤新平、山本芳翠からの差出書簡が所蔵されている。また、実践女子大学・同短期大学部図書館には、稲川寅吉宛の稲垣からの差出書簡一通が所蔵されている。これら下田を巡るネットワークについては、別途丁寧

47 46

に考察する。

『郷土更生誌』内外新聞通信社、昭和十年十二月。

第8版「一九二八（昭和三年七月）（名古屋大学データベース

<https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who8-17402> 二〇一三年六月二十日閲覧）。「官報」第4264号（大正十五年十一月）、

『工業雑誌』（第789号、大正十五年九月）もほぼ同内容の略歴を

載せている。また後、「親自然教育」の実現を目的として甲東学園

小学校（銀星女学院附属小学校）の校地と校舎を帝塚山学院が入手

し「仁川コロニー」（林間学舎・郊外学舎）として開校している（『帝

塚山学院100年史』第一章 昭和初期の帝塚山学院―学校教育の確

立』学校法人 帝塚山学院、二〇一六（平成二十八）年）。

『日本之日本人』大正十四年五月十五日号。

兵庫県内務部統計課、昭和七年三月。また、羽室庸之助を主幹者として（武庫郡甲東村仁川銀星女学校内 羽室庸之助）雑誌「梨庵漫

筆」を大正十四年十月二十五日に創刊している（12号・大正十五年

まで）。千三百部、頒布区域は、兵庫県、大阪府、京都府、岡山県、

広島県、東京府である（原本「新聞雑誌社特秘調査」昭和二年・警保

局、『新聞雑誌社特秘調査』大正出版、昭和五十四年十月）。この雑

45

50

誌は羽室の個人的な雑誌であつたと思われ、「一種の不老秘訣書とも云えよう」と評されている（『医文学』第10号、医文学社、大正十五年五月）。

『日本産業総覧』（第18版・昭和三年度用）工業之日本社、昭和三年十二月。

52 51

注23に同じ。

53

注3に同じ。

54

注1に同じ。

55

注1に同じ。なお、現在、岩村町の水野家には所蔵されていない（実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所客員研究員・鈴木隆一氏のご教示）。

56

注1に同じ。および、網走市図書館所蔵「高田源蔵日記」。

57

注23に同じ。

58

増補10版。鴻文社、大正元年十一月。及び、注54に同じ。

59

注57に同じ。

60

注23に同じ。

61

網走市が市制五十年を記念して市内二十か所に設置した史跡標柱のうちのひとつ（一九九七（平成九）年十二月二十六日公開）。標柱は、台座とも一・六mの御影石製、題字は、白井四郎（昭和六十年網走市文化賞受賞者）。（『網走新聞』一九九七（平成九）年十二月二十七日）。

※なお、「桂方岡」の表記は『網走市史「下巻開拓時代篇」』（網走市史編纂委員会編、網走市、一九七一（昭四十六）年）に拠ったが、引用した箇所は原則出典に従った。



図1 「小清水町全図」(実践女子大学図書館所蔵『小清水を拓いた人々』
には、編集委員の一人稲川吉寅の開効社の位置関係を示す赤字鉛筆
の書き入れがある(地図上部余白に「旧開効社牧場旧下地(稲川記
入)」。位置の正確さ(調査報告No.3「小清水町ふるさと研究会、
一九九六(平成八年)と照合)からこの書き入れは信頼性が高いと思
われる。

なお、開効社牧場(稲垣牧場)の「門」は、道々女満別線(旧釧路国
道)と国道344号の交点の変電所の所に高さ八尺、直径一尺三寸
位の檜の木であった(右「調査報告No.3」)。

図2 ①「開効社牧場事務所(跡)」(北海道電力小清水変電所付近、二〇二三(令和五)年十一月現在)



図2 ②「開効社牧場事務所跡」



「開効社牧場は、東京実践女子学校校長下田歌子が同校の基本財産造成のために明治三十六年、現在の共和1・2の一部と3の全域及び旧三共農場の全域にわたる広大な土地(二七〇町歩余り)を北海道国有未開地処分法により無償貸付けを受けたものである。翌三十七年春、稲垣吉慎を現地管理者として入地させこの地に事務所を建設し開拓にあたった。」

位置…小清水変電所東側(元町二丁目)腐食・破損により、現在看板はない

(小清水町教育委員会ホームページ)

<https://www.town.koshimizu.hokkaido.jp/education/>

二〇二三(令和五)年十二月六日公開、同日閲覧)

図3 「伝 稲垣橋」現在の共和三号橋付近。(稲垣の名を残すためボン止別川の二十三号線の橋を稲垣橋とした「調査報告No.3」小清水町ふるさと研究会、一九九六(平成八)年)



図4 桂ガ岡砦跡



図5 ①「北見女学校」(網走市史編さん室所蔵写真)



図5 ②「北見女学校遠景」(網走市史編さん室所蔵写真)



図6 生徒と園児募集の広告(『北見発達史』)



図7 実践女子大学図書館所蔵『小清水を拓いた人々』に載る稲垣吉慎の肖像写真。写真下部には、図1の書き入れと同筆と思われる（青字万年筆）「金婚式記念写真」の書き入れがある。



図8 桂の古木（二〇二三（令和五）年十一月現在）



図9 『北海道社交倶楽部』掲載の稲垣吉慎肖像写真



私立北見女学校主
（北見朝町）
稲垣吉慎君

図10 「私立北見女学校」の記念石碑（二〇二三（令和五）年十一月現在）



【付記】

本稿を成すにあたり、網走市郷土博物館館長・主席学芸員米村衛氏と斜里郡小清水町立小清水図書館司書・係長永井麻衣子氏には大変お世話になった。

米村氏の祖父・米村喜男衛氏はモヨロ貝塚（遺跡）の発見者であり、祖母（旧姓・源）の美登里氏は実践女学校の卒業生（昭和二年三月）で、網走女学校の教師であつた（『モヨロ貝塚 古代北方文化の発見』米村喜男衛、講談社、昭和四十四年十月）。美登里氏の遺品の中には、大切に保管された下田歌子の肖像写真と卒業アルバムもあつた。

また、永井麻衣子氏の曾祖父・永井咲治氏は、当時の恵那郡明知町から母の兄西村七五郎（稲垣の招致で入植した、恵那郡旧阿木村・現中津川市出身）をたよつて入植され、農業共済組合理事ほかを歴任した（『小清水を拓いた人々』）。

歴史の縁、地の縁を痛感した次第である。

網走市教育委員会図書館館長細川英司氏、同館司書永吉くみ氏、網走市教育委員会社会教育部にも資料閲覧調査に関して懇切なご尽力を賜った。重ねて御礼申し上げる。他にもお世話になった機関は多く、以下列記させていただく。

〔関係機関〕 網走市図書館、網走市郷土博物館、網走市企画総務部、

斜里郡小清水町立小清水図書館、斜里郡小清水町役場総務課、同建築課、光輪寺。

くぼ・たかこ／下田歌子記念女性総合研究所 専任研究員

a home at Sapporo Girls' General Elementary School. He lectured on politics. The content of the lectures in this summer seminar will be the same.

In 2010, the Hokkaido Educational Association published it as *Utako Shimoda's Lectures on Home Economics*. At that time, Shimoda's lecture in Hokkaido was so popular that around 500 people attended.

It seems that the establishment of a girls' school was planned under such circumstances, but the establishment of "Kitami Girls' School"

Following the school's history from establishment to closure demonstrates how Utako Shimoda in particular grew in Hokkaido.

We cannot shed any light on whether they were trying to promote women's education. That's what I'm thinking.

KUBO Takako

Utako Shimoda established the Imperial Women's Association in November 1898, and the following year, in May 1899, she established the Girls' Practical School attached to the Imperial Women's Association and the Girls' Crafts School. Thereafter, she devoted her life to educating ordinary girls and was involved in the establishment of many schools.

Immediately after the establishment of the Imperial Women's Association, she campaigned to explain its significance in the context of the importance of women's education. We also conducted an inspection for this purpose. The seeds Shimoda planted yielded sympathizers to that idea. Thanks to their support, the project quickly bore fruit in the form of the Niigata Branch.

It subsequently developed into the creation of respective affiliated schools: the Niigata Girls' Crafts School and the Hokuetsu Girls' School.

Additionally, the main school is Junshin Girls' School (chairman/principal), established in 1918. Ami Girls' Practical School (2nd generation principal) was established in 1919, and Meitoku Girls' School was established (by the principal) in 1921.

One of these schools is the Kitami Girls' School. Until recently, few details were known about the Kitami Girls' School. Hence, this paper focuses on discussing the Kitami Girls' School, which existed in the country for a short time (in present-day Abashiri City).

Yoshichika Inagaki founded the Kitami Girls' School in 1910, on what is now Kitamicho Minami-dori, Abashiri City. Shin opened it as a temporary school, and the new school was opened in Katsuragaoka, Abashiri City, in 1911.

A two-story wooden building with a dormitory was constructed and relocated. As a women's school for elementary school graduates and above, it was extremely significant as the first girls' school in the Abashiri jurisdiction to provide education for girls. However, the school was closed in 1919.

To raise funds to support this establishment, Inagaki ran the Kaikosha Ranch, and Tokyo's Utako Shimoda, the principal of Jissen Girls' School, said that the purpose was to create basic assets for the school (Abashiri Shimbun, etc.). Utako Shimoda was invited to the Hokkaido Education Association's 14th Summer Seminar. On August 5, 1901, he visited Sapporo and held